

平成21年度 入学試験(2月1日実施)

国 語

[40分]

[注意事項]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙は開かないこと。
2. 解答は、すべて解答用紙に記入すること。
3. 問題は1ページ～8ページの合計8ページあります。
ページが抜けていたら、すみやかに手を上げ、監督の先生に申し出てください。

東京農業大学第一高等学校中等部

一

次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字に、⑥～⑩の傍線部の漢字をひらがなに、それぞれ直しなさい。

- ① 建設作業にジユウジする。
- ② 父のテンキンで引越しをする。
- ③ 登山クラブをソシキした。
- ④ 朝顔市は夏のフウブツシだ。
- ⑤ 口はワザワいのもとである。
- ⑥ ぜひ、あの銭湯に入りたい。
- ⑦ それは承服できません。
- ⑧ 巻頭の部分が印象深い。
- ⑨ 二人で雑木林を散歩する。
- ⑩ 居間でテレビを見る。

二

次の①～⑤の四字熟語で漢字の使い方の正しいものを、それぞれア～オの中から選
び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ① | ア | 因果応報 | イ | 因果王方 | ウ | 院画応法 | エ | 院果応方 | オ | 因賀王報 |
| ② | ア | 不和雷同 | イ | 不破来同 | ウ | 付和雷同 | エ | 附和雷同 | オ | 富破来同 |
| ③ | ア | 一年発起 | イ | 一念発起 | ウ | 一年発期 | エ | 一念発気 | オ | 一年発記 |
| ④ | ア | 温子知新 | イ | 温古知心 | ウ | 温子智心 | エ | 温故知新 | オ | 温故智新 |
| ⑤ | ア | 粉骨細心 | イ | 分骨碎身 | ウ | 粉骨碎身 | エ | 紛骨碎心 | オ | 分骨細心 |

三

次の空欄にあてはまる語を、次のア～ソの中から選び、記号で答えなさい。

- ① が合う
 ② はちとらず
 ③ 立つ あとをにごさず
 ④ たで食う も好き好き
 ⑤ 雪の功
 ⑥ とらぬ の皮算用
 ⑦ 能ある はつめをかくす
 ⑧ の額
 ⑨ の涙
 ⑩ の一声

- ア からす イ 螢 ウ 鷹たか
 カ 馬 キ あぶ ク 虎こ
 サ すずめ シ 豚 ス たぬき
 エ 鳥
 ケ 猫ねこ
 セ 猿さる
 オ 狐きつね
 コ つる
 ソ 虫

四 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

最近^{いそが}は忙しいのでほとんどテレビを見ないのだが、その夜は思いがけず最後まで見てしまい、最近^{いそが}にない感動を味わった。

木村さんがりんごの自然農法に挑^もんだのは、三十年前、まだ二十七歳の若い頃^{ころ}だった。夫婦で八百本のりんごの木を育てていた。りんごの木は病虫害にやられやすいので、農薬を噴霧^{かんむし}車を使って撒布^{さんぷ}していたが、霧状^{きじょう}になった農薬は自分にもかかってくるので、夫婦とも薬害のひどい皮膚炎^{ひふえん}に苦しんだ。

こんなことをしていたら命にかかわると思った木村さんは、自然農法の本を頼^{たの}りに、農薬も化学肥料も使わないでりんごを栽培^{さいばい}することを始めたのだ。ところが、みごとに失敗。害虫にやられたうえに病気で無残に葉が枯れてしまったのだ。二年目も三年目も失敗。三人の娘をかかえて、経済的に困窮^{こんきゆう}し、まともな食事もできなくなっていた。周囲からはあざ笑^{あざわら}う声も聞えてきた。

五年目、木村さんは死のうと思つて、岩木山中に入った。森の中を進むうちに、不思議なものを見た。りんごの木が一本、葉を虫にも病気にもやられずに立っていたのだ。こういうのを「意味のある偶然^{ぐうぜん}」と言う。懸命^{けんめい}に何かを求めていると、まるで待っていてくれたかのように、啓示^{けいし}をもたらすものに奇跡^{きせき}的に出逢^{であ}うのだ。それはりんごの木ではなかったことが後でわかるのだが、その時はなぜだと思つて、周囲の土壌^{どじよう}を調べてみた。土壌は手で掘^ほれるくらい柔らかく、空洞^{くうどう}になっているところもあり、雑草も木も根が実によく張っている。木を支えるのは、根だ。りんご畑の土壌は重量のある大型噴霧^{はんむ}車の車輪で踏み固められている。雑草もない。それでりんごの木は本来の生命力を奪^{うば}われているに違^{ちが}いない。そうだったのか。一筋の光明^{みやう}が見えた。

まともな弁当も持たせることのできなかった娘たちも、途中^{とちゆう}でやめたら、自分たちは何のために我慢^{がまん}してきたの、と言つて、父親の背中を押した。

りんごの木に花が咲き実がなったのは、八年目だった。そして、その後、年ごとにすばらしい実が収穫^{しゆくわく}できるようになっていったのだ。土壌を自然のままに柔らかくするために、噴霧車を使うのをやめた。【1】害虫予防には、米などを発酵^{はっこう}させて作った酢^すを手作業で噴霧した。年中畑を見回つて、害虫が増えたと、すぐに手作業で退治した。これといって驚^{おどろ}くような新技術を開発したわけではなかった。すべて手作業でやることばかりだから、効率主義には反するし、重労働を自分に強いることになる。【2】大切なことは、りんごの木一本一本を命あるものとして愛情をこめて守つてやるという姿勢なのだ。【3】

番組の内容がとても示唆^{しそく}に富むものだから、つい詳しく説明してしまったが、ともかく木村さんが語る言葉は、一つ一つが現代の技術文明の思ひ上がりや切り捨てた大事なものを突いていて、はっとさせられるのだ。

「(りんごの木や実を)育てるんじゃない、育つのを手助けするだけだ」【4】

「(八年目にはじめて花をつけたのは)私が咲かせたんじゃない、りんごが頑張^{がんば}ったんだ。り

んごの木に『よくやった、よくやった』と酒を撒いてやった」

「噴霧車で土を踏み固めることに対して」りんごの木も土もいやがってると思う。いやがることはしないほうがいい」⁵（八百本のりんごの木に酢をかけるのに、手作業だと三日かかる重労働だが、噴霧車を使うと一時間半でできるという）

「技術は心が整った後からついてくるものだ」

そして、りんごの実をもぐ時に、何度となく繰り返される「よくやったね」という称賛の言葉と「ありがとう」という感謝の言葉。

私は、命がけで無農薬農法によるりんごの栽培を成功させながら、収穫するりんごに対し、絶えず「ありがとう」を連発する木村さんの心の持ち方に、深い感動を覚えたのだ。

「天地への感謝」と言おうか。現代の技術文明の大きな忘れ物あるいは欠陥は、この「天地への感謝」の気持だろう。

二年ほど前だったか、あるローカルラジオ局の番組で、聴取者からのたよりを紹介する中に、小学生の子を持つ母親からの意見があった。「学校給食で給食費を払っているのに、食べ終えた後に『ごちそうさまでした』とお礼を言うのは、おかしい」というのだ。

この意見の「おかしさ」⁴を、投書者自身が「おかしい」と思っていないところに、今の時代の「おかしさ」がある。そんなことを言う母親は問題外だと言って、笑い事で済ますなかれ。そういう意見が出てくる時代的な素地があるのだから。

この投書者の意見には、二つの問題がある。一つは、「ごちそうさまでした」という言葉にこめられた意味について全く理解していないという問題。例えば、家庭で家族が食事をする場合、料理をした母親も食べ終えたら、同じように「ごちそうさまでした」と言うのは、この言葉は料理を作った人への感謝のためだけではないからだ。食物を育んでくれた太陽や大地や雨や様々なものに対する感謝の気持の表現なのだ。

人間として生きるうえでの、そういう根源的な謙虚さがまるで念頭に浮かばないのは、文化の断絶があるからだろう。その決定的な原因は、おそらく核家族化にあると私はとらえている。昔のように、親子三代が同居しているのが多くの家庭のスタイルだった時代には、そういうありふれた、しかし大事な生活習慣と心の持ち方は、とくに意識的に教えなくても、朝な夕なの生活の中で、伝承されていた。しかし、高度成長期頃から若者がどんどん家を出て独自の生活をするようになり、とくに結婚して団地やアパートやマンションなどで独立した住み方をするのが一般的なスタイルになると、家族文化が中途半端な形でしか受け継がれなくなる。御天道様でも神様でもいい、人知を超えた大いなるものを畏れる心とか、家には必ず仏壇を設けて、折々に線香を上げて先祖を大事にするとか、躰や基本的なモラルや社会常識を親が教えるといったことが途絶する断層が生じたのだ。

そういう時代に生まれた子どもたちが、今家庭を持って子育てをしている世代になっている。希薄化された家族文化は、その子どもたちの世代でいちだんと希薄化される。

もう一つの問題は、何事につけ物事を金銭的な価値で評価する発想が、多くの人々の頭の中に染みつくようになったということ。その対極にある心の領域の価値の重さがわからなくなっ

ている。これも高度成長期頃から顕著な時代傾向になり、その世代の子どもの世代になると、決定的な時代傾向となっている。ちなみに、今、十代から二十代前半くらいの若者に対するあるアンケートで、一番欲しいものは何かという問いに対する回答の第一位は「①」。理由は、「①」があれば何でもできるから」というわけだ。

戦後の食糧難の時代には、日本人の子どもたちの中に栄養失調状態の子や栄養失調とは言えないまでも蛋白質や脂肪やビタミン類の摂取量が少なく栄養バランスが著しく偏った子が多かったことから、政府はアメリカが提供した脱脂粉乳を学校での昼食時に給食として出した。しかし、その後日本の食糧事情が改善され、アメリカの食糧提供もなくなったので、給食の目的は子どもたちが同じメニューと一緒に食べ、配膳などの作業も子どもたち自身でやるという食育的ねらいを持つものになった。だが、親たちの多くは、給食を弁当を作る手間を省いてくれるものという受け止め方をしている。ファミレスで食事をさせている感覚だ。給食費を払っているのだから「ごちそうさまでした」と言う必要はないという意見が出てくるのも、自然の成りゆきと言えるだろう。

「家族文化の断絶」と何事につけお金に結びつけて考える心の持ち方とが、「二重奏」を奏でるようになった結果、何がもたらされたかと言えば、感性の衰退だ。「ごちそうさまでした」の意味がわからない母親の例をここに取り上げたのは、感性の衰退という時代相を端的に示そうと思ったからだ。無農薬でりんごを栽培している木村さんの感性のすばらしさは、どんな時代であつても失つてはならない。大切な「心の習慣」と言える。

（柳田邦男『気づき』の力―生き方を変え、国を変える―による）

《注》

*1 示唆…それとなく教えること。ほのめかすこと。

*2 モラル…道徳。人の行動において善悪の判断のもとになるもの。

*3 端的…手っ取り早く要点をとらえているさま。

問一

傍線部1「最近にない感動を味わった」とありますが、何に対する感動なのですか。その答えとして最もふさわしいものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の生活を犠牲にしてまでも、あきらめずに無農薬農法を完成させた木村さんの強い信念。

イ 死まで考えた木村さんに、森の自然が無農薬農法成功のヒントをそつと教えてくれたという奇跡。

ウ 自分の苦労は問題にせず、収穫するりんごに称賛や感謝の言葉を何度も投げかける木村さんの心の持ち方。

エ 何度も失敗し、あきらめかけていた木村さんに励ましの言葉をおくり、成功へと導いていった娘たちの愛情。

オ 機械に頼らず、手作業を選択し、自らに重労働を強いてまでもりんごの木を守ろうとする木村さんの優しさ。

問二

波線部 a 「あざ笑う」の意味として最もふさわしいものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア あきれて笑う イ 小さな声で笑う ウ 楽しそうに笑う
エ ばかにして笑う オ うれしそうに笑う

問三

傍線部 2 「そうだったのか」とありますが、木村さんは何に気付いたのですか。その答えとして最もふさわしいものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 雑草もない土地では、りんごの木も生命力が奪われているにちがいないこと。
イ 木を支えるのは根であるのに、畑の土壌は噴霧車の車輪で固められていること。
ウ 人間は懸命に何かを求めていると、その助けとなるものに出逢えるということ。
エ 丈夫な木が育つには、土の柔らかさとよく張っている根が大切なのということ。
オ 木が育つ土壌は、手で掘れるくらい柔らかく、栄養に富むものがあるということ。

問四

本文には次の一文が抜けています。入るべき箇所を、本文中の【 1 】～【 5 】の中から選び、数字で答えなさい。

しかし、そこが重要なところなのだと、木村さんは自分で見出した自然農法の信念を貫く。

問五

傍線部 3 「おかしい」・ 4 「おかしさ」・ 5 「おかしさ」とありますが、それぞれ何に対する「おかしさ」のですか。その答えとして最もふさわしいものを、次のア～カの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 誰が作ったか分からないものに対して「ごちそうさまでした」を言う必要がないのは、当然のことだという意見。
イ お金を払って食べたものに「ごちそうさまでした」を言う必要はないという意見に、何の疑問も持たないこと。
ウ お金を払っているのに、食後に「ごちそうさまでした」と学校が言わせるのはいけないということ。
エ お金を払って食べているのに、食後に「ごちそうさまでした」とお礼を言うこと。
オ 給食に対して「ごちそうさまでした」を言う必要はないという母親は、問題外だという意見。
カ お金を払って食べているのに「ごちそうさまでした」と言う必要はないという意見。

問六

波線部 b「笑い事で済ますなかれ」の意味として最もふさわしいものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 笑って済ましてはいけない イ 笑って済ますしかない
ウ 笑って済ましてしまおう エ 笑って済ますわけではない
オ 笑って済ますのがよい

問七

傍線部 6「二つの問題」とありますが、どのような問題なのですか。その答えとしてふさわしいものを、次のア～キの中から二つ選び、記号で答えなさい。(順不同)

- ア 心の領域の重さがわからなくなるという現象が、高度成長期頃からよくみられるようになったという問題。
イ 何事につけ物事を金銭的な価値で評価する発想が、多くの人々の頭の中に染みつくようになったという問題。
ウ 親たちの多くが、給食は弁当を作る手間を省いてくれるものに過ぎないという受け止め方をしているという問題。
エ 高度成長期頃から核家族化が進み、先祖を大切にする心や社会常識が親から子へ教えられなくなったという問題。
オ 人間が生きるうえで必要な感謝の気持が、時代の変化から、現代人の頭にはなかなか浮かばなくなったという問題。
カ 「ごちそうさまでした」という言葉は、食物を育んでくれた自然への感謝の表現であることを全く理解していないという問題。
キ 料理をした母親が、自分の料理に対して「ごちそうさまでした」というのはなぜかという理由を、全く理解していないという問題。

問八

傍線部 7「文化の断絶」とありますが、何が「断絶」したのですか。その答えを端的に表現した部分を、傍線部 7のある段落の中から、十字で抜き出して答えなさい。(字数には句読点や記号もふくみます。以下同様)

問九

空欄 ① にあてはまる語として、最もふさわしいものを、空欄 ① より後ろの部分から探し、二字で抜き出して答えなさい。

問十

傍線部8「二重奏」を奏でる」とありますが、どのような状態を表しているのですか。その答えとして最もふさわしいものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 二つの物が重なり合って、さらに良いものへと発展していくような状態。
- イ 二つの物が一緒になりながらも、互いの良さを失わないような状態。
- ウ 二つの物がうまく合わさって、一つの事態を生み出すような状態。
- エ 二つの物が同時に進行し、一つの終わりに結びつくような状態。
- オ 二つの物が独立しつつも、それぞれの欠点を補うような状態。

問十一

傍線部9「大切な「心の習慣」」とありますが、これはどのようなものですか。本文中から、六字で抜き出して答えなさい。

問十二

次のア～エについて、本文の内容に合致^{がっち}しているものには○、合致していないものには×で答えなさい。(ただし、全て同じ記号で答えたものは正解としません)

- ア 木村さんが語る言葉の一つ一つに、我々は、技術に頼りすぎていることや自然への感謝を忘れていることを思い知らされる。
- イ 核家族化は、家族文化の中途半端な伝承という事態を生み出し、その子どもたちが親になった世代でいちだんと家族文化が失われる傾向にある。
- ウ 親子三代が同居しているのが多くの家庭のスタイルだった時代には、家族文化の伝承が日々の生活の中で意識的になされていた。
- エ 感性の衰退という事態によって、家族文化の断絶やどんな物事も金銭的な価値で評価する心の持ち方が生じてしまった。